

報 告

消渴について 古医書からの一考察

國松佳子 戸田静男

関西医療大学大学院 保健医療学研究科

要 旨

目的

近年の糖尿病罹患人口の増大は、生活習慣病に起因するといわれている。このことから、糖尿病は現代病の一つと捉えられている。古医書に記載されている「消渴」は、口渴、多飲、律液消耗の症状であると述べられている。これらは、現代でいう糖尿病の症状と類似している。そのようなことから、われわれは、古医書から「消渴」についての論述を抽出、考察した。このことは、糖尿の鍼灸治療に対して大いに参考になるものと思われる。

方法

『黄帝内経』、『諸病源候論』、『備急千金要方』、『三因極一病証方論』、『鍼灸資生経』、『濟生方』、『普濟方』、『丹溪心法附餘』、『古今醫統大全』、『鍼灸大成』、『證治準繩』、『類経』、『景岳全書譯注』が参照された。

結果

「消渴」について最も重要と思われる古医書の記載を年代順に以下のように列記した。

1. 『黄帝内経』 奇病論篇では「口内が甘くなる。これは脾痺といい津液が脾に停滞。原因は美食過食で、熱が溢れる。」とある。
2. 『諸病源候論』では「口渴で水を飲む」という症状で「癰疽多発」とある。また『黄帝内経』の消渴の原因と同じ記載がある。
3. 『備急千金方』では「飲酒」を主な原因とし、「五臓の乾燥」を防ぐため生活習慣を慎み、その必要性が「大癰にある」と述べている。
4. 『三因極一病証方論』では「消渴は精血の消耗、津液の枯渇」と述べている。
5. 『鍼灸資生経』では、消渴の治療穴12穴が記載されている。
6. 『濟生方』では「消渴はすべて腎」とあり、『備急千金方』と同じく戒めを述べている。
7. 『普濟方』では「三消を患う者」とし、『備急千金方』、『濟生方』と同じく戒めがあり、原因は「心火」と述べている。
8. 『丹溪心法附餘』では「消渴」を「三消」に分け、「皆熱が原因。」としている。
9. 『古今醫統大全』では「消渴に三焦あり」とし、『備急千金方』、『濟生方』、『普濟方』と同じ戒めがあり、「心火の乗」と述べている。
10. 『鍼灸大成』では、消渴の治療穴19穴が記載されている。
11. 『證治準繩』では「原因は飲食物。或いは精神の度を過ぎ」で、「陰気を損失」とし、その結果「燥熱の鬱滞」と述べている。
12. 『類経』では三消に分け「消の陰陽」を述べ、「すべて火証とすることに疑問」を呈している。
13. 『景岳全書譯注』では『類経』と同様に分けるが「虚実に分ける」ことを強調している。

考察

「消渴」の症状には、糖尿病による口渴、多尿、腎症、神経障害や皮膚軟部組織の感染症と思われる記載が各古医書にみられた。「消渴」は五臓における気、血、津液の停滞が慢性化し、化火した結果、陰分を消耗した陰虚の症状で、治療は第一次予防である陰虚の前段階にあたる実火実熱段階での養生法が重要であると思われる。

結語

「消渴」の鍼灸治療においても、生活習慣の変容が最重要であることを古医書の考察で知ることができた。

キーワード：消渴、糖尿病、古医書

【緒言】

「消渴」は最も古くは、『黄帝内経 素問』奇病論篇四十七に記載され、そこに発生経過が述べられている。

「帝曰有病口甘者 病名為何 何以得之 岐伯曰此五氣之溢也 何以得之 名曰脾瘕 此肥美之所發也 此人必數食甘美而多肥也 肥者令人内熱甘者令人中滿 故其氣上溢轉為消渴 (黄帝がいう。口の中が甘くなる病がある。これは何の病か。岐伯がいう。これは五味の精気が上に向かって溢れたためです。病名を脾瘕といいます。食物は口から入って胃に蔵されますが、脾によって食物の精気として運化されて、津液が脾に停滞してしまふことがあります。そのため、口内に甘味を感じます。これは栄養豊富な美食で誘発された病です。この病になると、みな濃厚で甘く美味しい食物を好んで多く食べるようになります。濃厚な食味は人の体内に熱を生み、甘味は胸腹部を張満させます。ゆえに、その気が上部に溢れて消渴と」と。このように二千年以上前に、消渴として『黄帝内経』に取り上げられた消渴は、現代の糖尿病¹⁾と類似する症状である。

消渴の消は「きえる、つきる、なくなる、よわる、お

とろえる、とける」の意があり、渴は「かわく、のどがかわく、つきる、かれる、むさぼる」の意がある²⁾。この、消渴は血糖測定のない時代では、治療時にはすでに合併症が発生した段階で多くは不治の病であった。

現代、糖尿病は血糖コントロールによって死に直結する疾患ではなくなった。しかし、生活習慣病として慢性合併症である網膜症、腎症、神経障害を発症し、動脈硬化性疾患も伴い、QOL (quality of life) の低下へと導いていく代表的な疾患である。世界的に増大し続けており、本邦の糖尿病数は2012年の厚生労働省国民健康・栄養調査結果³⁾では、950万人で、糖尿病の可能性を否定できない人(境界型に相当)数が1,100万人と推定されている。

また、消渴の医中誌における研究は主に中医学弁証と方剤の研究31件検索であり、古典文献研究はさらに少ない。消渴に対して多くの古医書に養生法が記載され、鍼灸治療法も記載されている。このようなことから、古医書の消渴を考察研究することで、増え続ける現代の糖尿病に対しても有益な鍼灸治療を提示できるのではないかと考えた。

【方法】

著名な中国古医書の13書^{5~17)}を使用した。

(表1、2)

表1 中国の代表的医書(下線が今回使用した医書)

中国		日本	
新石器時代 「砭石」の出現	1万年 夏 殷(1600?) 周(前1100)	縄文 弥生	約1万年前 BC3世紀頃~ 倭の国王が後漢皇帝より金印 (57)
『黄帝内経』の出現 (B.C.475~221)	春秋 戦国(前400) 秦(前221) 前漢(前202)		
『史記』司馬遷(B.C.90) 『馬王堆帛書』(B.C.25) 『黄帝八十一難経』扁鵲 (B.C.25~A.D.210) 華佗が麻酔法による開腹術の 実施(112~208)	後漢(25)		
『傷寒雜病論』張仲景 (200~210)	三国(220) 隋(581) 唐(618)		卑弥呼が魏に使いを送る(239)
『諸病源候論』巢元方(610) 『備急千金要方』孫思邈(652)	宋(960) 金(1120)	飛鳥 (701)	法隆寺建立(607)遣隋使 第一回遣唐使(630) 大化の改新(645) 朝廷は農薬寮を設け中国医学を導入
		平安 (794)	『医心方』丹波康頼(984)

『三因極一病証方論』 陳言 (1175) 『鍼灸資生経』 王執中 (1220) 『濟生方』 巖用和 (1253) 『普濟方』 朱肅 (1460) 『丹溪心法附餘』 程充 (1481) 『古今醫統大全』 徐春甫 (1556) 『鍼灸大成』 楊繼洲 (1601) 『證治準繩』 王肯堂 (1602) 『類経』 張景岳 (1624) 『景岳全書譯注』 張景岳 (1640)	元 (1271) 明 (1368) 清 (1644)	鎌倉 (1192) 室町 (1392) 安土 桃山 (1573) 江戸 (1603~1868)	『頓醫抄』 梶原性全 (1303) 『啓迪集』 曲直瀬道三 (1574) 『扁鵲新鍼書』 『鍼灸合類』 『鍼灸枢要』 『刺鍼家鑑集脈論』 『鍼灸五蘊抄』 『鍼灸拔粹』 『獅子流西村鍼灸秘録』 『鍼灸則』 菅沼周桂 (1767) 『内科秘録』 本間棗軒 (1864)
--	--	---	--

表2 参照箇所

古医書	参照箇所
『黄帝内経 素問』	奇病論篇四十七
『諸病源候論』	消渴諸病
『備急千金要方』	第二十一卷消渴
『三因極一病証方論』	消渴叙論 三消脉證
『鍼灸資生経』	消渴第三卷
『濟生方』	四卷 第二十二消渴論治
『普濟方』	百七十六卷消渴門
『丹溪心法附餘』	燥門消渴六十八
『古今醫統大全』	五十二卷消渴門
『鍼灸大成』	消渴第二~八卷
『證治準繩』	難病 消瘴第五冊
『類経』	十六卷消瘴熱中 六十附消瘴治法
『景岳全書譯注』	三消消渴

【結果】

『黄帝内経』以前の成立といわれている、『馬王堆帛書』⁴⁾の五十二病方には消渴の記載はなかった。

『黄帝内経 素問』奇病論篇四十七では「帝曰有病口甘者 病名為何 何以得之 岐伯曰此五氣之溢也 何以得之名曰脾瘴 此肥美之所發也 此人必數食甘美而多肥也 肥者令人内熱甘者令人中滿 故其氣上溢轉為消渴」と記載され部位は脾で、口内の甘味は、消渴を發症する前の脾瘴の症状としてあらわれると記載がある。

『諸病源候論』は隋代、610年に巢元方の著書で消渴諸病の篇に記載がある。病因は『黄帝内経』と、同様の美食過食で誘発され、石薬による燥熱も病因となり、部位は脾、腎で症状は口渴と口内が甘い、そして熱が留まり経絡の流れがなくなり血気が塞がり癰疽が多発すると記載されている。

「由少服五石諸丸散積經年歲石勢結於腎中使人下焦虚熱」

「石勢独盛則腎為之燥故引水而不小便也」

「其病變多發癰疽此坐熱氣留於経絡不引血氣壅滯故成癰膿」

「有病口甘者名為何 何以得之 此五氣之溢也 名曰脾瘴 夫五味入於口 藏於胃 脾為之行其精氣 溢在脾冷人口甘此肥美之所發 此人必數食甘美而多肥令人内熱甘者令人滿 故其氣上溢轉為消渴」

「其久病變成癰疽或成水疾」

『備急千金要方』は唐代、652年に孫思邈の著書で第二十一卷消渴の篇に記載がある。「長年の飲酒で消渴とならない者はいない」と一番の原因とし「酒宴がおさまることなく、ついに三焦は猛烈に熱をもたされ五臓は乾燥する」とし、「慎むものに三つ一、飲酒 二、房事 三、塩辛い食べ物や麵類」と記載されている。また「食事は人の倍食べるが気力がつかない。虚熱が原因である」と記載され、症状は多尿、大癰で、「戒めの所以は大癰にある」、「消渴を病む人は必ず癰疽が発生して死ぬ」と記載されている。

「論曰凡積久飲酒未有不成消渴」

「然則大寒凝海而酒不凍明其酒性酷熱物無」

「以加脯炙鹽鹹酒客耽嗜不離」

「其口三之後製不由己飲啖無度咀嚼醬不擇酸鹹積年長夜酣興不解遂使三焦猛熱五臟乾燥」

「木石猶且焦枯在人何能不渴 治之愈否屬在病者 若能如方節慎旬月可瘳 不自愛惜死不旋踵」

「方書醫藥實多有效其如不慎者何其所慎有三 一飲酒二房事三咸食及面」

「能慎此者雖不服藥而自可無他 不知此者縱有金丹亦不可救深思慎之」

「又曰消渴之人愈與未愈常須思慮有大癰何者 消渴之人必於大骨節間發癰疽而卒 所以戒之在大癰也當預備癰藥以防之」

『三因極一病証方論』は金代、1175年に陳言の著書で消渴叙論、三消脉證の篇に記載がある。心火が散漫していくと渴となり、渴病から消渴になり、消渴はすべて精血の消耗、津液の枯渴によりおこると記載がある。部位として消中の脾、消腎の腎は心に属すると記載されています。症状は、口渴、多尿、不眠、瘦せが記載されている。

「夫消渴皆由精血走耗津液枯乏引飲既多小便必利寢衰退微肌肉脱剥指脉不榮精髓内竭」

「况心虚煩悶最能發渴風寒厚湿病冷作熱入 于腎經引水自救皆明文也不知其因施錯謬 醫之大患不可不知」

「渴病有三日消渴消中消腎消渴属心 故煩心致心火曼渴而引飲經云脉軟散者當病消渴」

「消中属脾瘴熱成」

『濟生方』は金代、1253年に巖用和の著書で四卷、第二十二消渴論治の篇に記載がある。

消渴は、腎において起きるとし、節度の無い飲食、房

事、丹石服用で「腎水が枯れ心火が燃え三焦が五臓を乾燥させる。」と述べ、症状は口渴や多尿とし、ここにも「常に防がねばならない患いが癰」とされ、よくよく慎むものとして「一、飲酒 二、房事 三、塩辛い食べ物」とし「これらをよく慎む者は服薬せずに自力で治る。これらをわきまえずに、やりたいようにやるものは高貴な妙薬でも救うことはできない。深く考え慎まなければならない。」としている。

「論曰消渴之疾皆起於腎」

「盛壯之時不自保養快情縱慾飲酒無度喜」

「食脯炙醢醢或服丹石遂使腎水枯竭」

「心火煩熾三焦猛烈五臟乾燥」

「消渴之人愈興未癒常防患癰疾」

「其所慎者三一飲酒二房事三鹹食」

「及能慎此者雖不服藥而自可」

「不如此者縱有金丹亦不可救漫思慎之」

『普濟方』は金代、1460年に朱肱の著書で百七十六卷消渴門の篇に記載がある。腎虚あるいは美食で肥することで起き、腎虚で心火を制御できないと記載されている。部位は、心、脾、腎で症状は、口渴や尿が少ない場合や多尿の場合があり、『備急千金要方』『濟生方』と同じ慎むべき戒めを述べている。

「夫三瘳者 本起腎虚或食肥美之所發也」

「陰陽阻隔 氣不相榮 故陽阻陰而不降 陰無陽而不昇 上下不交 故成疾矣」

「夫瘳者 瘳渴瘳中瘳腎也 此由少年服乳石熱藥」

「耽嗜酒肉 葷辛熱麵炙」

「荒淫色慾 不能將理 致使津液耗竭」

「脾中受熱 水臟乾枯 四體尪羸 精神恍惚」

「吃食多而飲水少 小便赤黃者 瘳中也」。

「飲水味甘 隨飲便下 小便而白濁 腰腿瘳瘦者 瘳腎也」

「斯皆五臟精液枯竭 經脈血澁 榮衛不行 熱氣留滯 遂成斯疾矣」

「渴病有三 曰瘳渴瘳中瘳腎 瘳渴属心 故煩 必致心火散漫 渴而引飲」

「瘳腎属腎 盛壯之時 快情縱慾 年長腎衰 多服丹石之所致 經云腎實則瘳 不渴而小便自利名曰瘳腎 亦名内瘳」

「瘳渴以渴而不利 引飲加甚言之 瘳中以不渴而利」

「熱氣内瘳言之 瘳腎以渴而復利 腎燥不能制約言之」

「熱氣上騰 心虚受之 病属上焦 謂之瘳渴」

「熱畜於中 脾虚受之 病属中焦 謂之瘳中 熱伏於下 腎虚受之 病属下焦 謂之瘳腎」

「是腎虚弱心氣涣散所致 故可補心腎 去煩熱 則其疾可愈」

「上實熱而下虚冷 上熱故煩渴多飲 下寒故小便多出」

「本因下部腎水虛 而不能制其上焦心火 故上實熱而下虛冷」

「補養元氣 若下部腎水得實而勝退上焦心火 則自然渴止。」

「陰實陽虛不能制水 小便利而常多 豈知病渴小便多者 榮養百骸 故腸胃之外 燥熱大甚 雖復多飲于中」

「虛則虛熱 心火屬陽而本熱 虛則爲寒 若腎陰虛則心火陽實」

『丹溪心法附餘』は明代、1481年の程充の著書で燥門 消渴六十八の篇に記載がある。

「消渴には肺を養い、火を降ろし血の生産を促すことが主な治療である。」「上、中、下の三消に分けて治療」し、部位は「上消の者は肺」、「中消は胃」、「下消の者は腎」で原因は皆、熱でなったものであると記載されている。

「消渴養肺降火生血爲主」

「分上中下治 三消皆禁用半夏 血虛亦忌用」

「内傷病退後燥渴不鮮 此有餘熱在肺經。」

「上消者肺也 多飲水而少食 大小便如常」

「中消者胃也 多飲水而小便赤黃」

「下消者腎也 小便濁淋如膏之狀 面黑而瘦」

「消渴 消中 消腎 經意皆云熱之所致也」

『古今醫統大全』は明代、1556年の徐春甫の著書で五十二卷消渴門の篇に記載がある。

病因はすべて心火の乗と美食で肥ると記載がある。上焦は肺、中焦は胃、下焦は腎と記載されている。症状は多飲、多尿、多食、小便淋、癰疽、背疽と記載されている。

「消渴有三焦受病之異」

「病機論消渴之疾 三焦受病也 有上消中消腎消」

「上焦受病 多飲水而小食 大便如常或小便清利」

「知其燥在上焦 屬於肺也 又謂之鬲消病也」

「中焦受病 渴而飲食多 小便黃 經曰熱能消穀」

「知其熱在中焦 屬於胃也 又謂之消中」

「下焦受病 初發小便淋下 知膏油之狀」

「知其病在下焦 屬於腎也 又名腎消」

「諸經皆燥熱爲渴惟三焦爲甚」

「有因肥甘美食而渴者 有醉飽入房而渴者」

「消渴病總爲心火所乘 肺金太燥」

「水不制火 消中屬脾瘴熱而有三者之異」

「消渴病因膏粱肥之變」

「消渴雖有數者之不同」

「其爲病之肇端 則皆膏粱肥甘之變」

「酒色勞傷之過 皆富貴人病之」

「則治可廖 若有一毫不謹 總有名醫良劑 必不能有生矣」

「消渴屬熱有內外虛實之分 夫消渴本乎熱也 而熱有內

外虛實之分 消渴末傳瘡疽中滿論」

「總論所謂 末傳能食者 必發癰疽背瘡」

「有能食者 必傳中滿鼓脹 皆爲不治之證也」

『證治準繩』は明代、1602年の王肯堂の著書で第五冊、難病、消瘴の篇に記載がある。

不適切な飲食が病因であること、あるいは精神の度を過ぎ違えることや、大きな病での陰気の損失が病因であると記載があり、部位は腸胃、腎で、症状は、口渴、多飲、多食、多尿と記載がある。

「消渴者因飲食服餌之失宜腸胃乾涸而氣不得宣平或精神過違其度」

「而耗之或因大病陰氣損」

「而血液衰虛陽慄悍而燥熱鬱甚之所成也」

「吞飲水多而小便多日消渴若飲食多不甚渴小便數」

「而消瘦者名曰消中若渴而飲水不絕腿消瘦而小便有脂液者」

「名曰腎消一皆以燥熱太」

『類經』は明代、1624年の張景岳の著書で十六卷消瘴熱中、六十附、消瘴治法の篇に記載がある。病因は火の偏盛で、上における神消、下における精消があると記載がある。「消の陰陽」を述べ「乃以歸脾之屬去白木木香 八味之屬 去丹皮澤瀉 一以養陽一以養陰 出入間用至三百餘劑 計人參二十餘斤而後全癒 此非神消於上 精消於下之證乎 可見消有陰陽 不得盡稱爲火證 姑紀此一按 以爲治消者之鑒」とし、「すべて火証とすることに疑問」を呈している。部位は心肺腸胃脾肝腎で症状は口渴、多飲、消穀善飢、頻回の尿便と記載がある。

「愚按消瘴消中者 卽後世所謂三消證也 凡多飲而渴不止者爲上消消穀善饑者爲中消消便頻」

「而膏濁不禁者爲不消如氣厥論之云肺消鬲消奇病論之云消渴卽上消也」

「脉要精微論云瘴成爲消中 師傳篇云 胃中熱則消穀令人善饑 卽中消也」

「邪氣藏府病形篇云 腎脉肝脉微小皆爲消瘴 肝腎在下卽下消也」

「雖多飲於中 終不能浸潤於外 榮養百骸 故渴不止而小便多出」

「夫一身之心火 甚於上 爲膈膜之消甚於中爲腸胃之消甚於下 爲膏液之消 甚於外 爲肌肉之消」

「上甚不已 則消及於肺 中甚不已 則消及於脾下甚不已 則消及於肝腎 外甚不已 則消及於筋骨 四藏皆消盡 則心始自焚而死矣」

「故素問有消瘴 消中 消渴 風消 膈消 肺消之說 消之證不同歸之火則一也 此三消從火」

「然以予之見 猶有說焉如陰陽別論曰二陽之病發心脾其

傳爲風消 此以陽明爲十二經之海 土衰而木氣乘之故爲肌肉風消也」

「氣厥論曰 心移寒於肺爲肺消 飲一溲二死不治 此言元陽之衰 而金寒水冷 則爲肺腎之消也」

「是皆以陰抑陽 以水制火 必以溫劑 散去寒邪 其疾自癒 諸如此者 總皆消渴之類也 夫消者 消耗之謂」

「陽勝固能消陰 陰勝獨不能消陽乎 故凡於精神血氣 肌肉筋骨之消無非消也」

「損傷心腎 元陽既虧 則陰邪勝之 故多陰夢 陽衰則氣虛 陽不師陰 則水不化氣 故飲水少而溺濁多也」

「陽氣漸回 則陰邪自退 此正內經所謂心移寒於肺 飲一溲二之證耳」

「此非神消於上 精消於下之證乎 可見消有陰陽 不得盡稱爲火證 姑紀此一按 以爲治消者之鑒」

『景岳全書譯注』は明代、1640年の張景岳の著書で三消消渴の篇に記載がある。病因は陰虚によって発症すると記載され、「虚実に分ける」ことを強調している。部位は上焦、中焦、下焦に分かれ、肺と胃と腎であり症状は口渴、多飲、消穀善飢、痩せ、尿淋濁が記載されている。

「三消之病三焦受病也」

「上消者渴證也大渴引飲隋飲渴以上焦之津液枯涸」

「古云其病在肺而不知心脾陽明之火皆能熏炙而然故又謂之膈消也」

「中消者中焦病也多食善饑不爲肌肉而日加削瘦其病在

脾胃又謂之消中也」

「下消者下焦病也小便黃赤爲利淋爲濁」

「如膏如脂面黑耳焦日漸消瘦其病在腎故又名腎消也」

「此三消者古人悉認爲火證然有實火者以邪熱有餘也」

「凡治消之法最當先辨虛實」

「但去其火則津液自生而消渴自止」

「若由真水不足則悉屬陰虚無論上中下急宜治腎必使陰氣漸充精血漸復則病必自愈」

「若但知清火則陰無以生而日見消敗益以困矣」

「一三消證古人以上焦屬肺中焦屬胃而多從火治是固然矣」

「然以余論之則三焦之火多有病本於腎而無不由乎命門者」

「夫命門爲水火之腑凡水虧證固能爲消渴」

「而火虧證亦能爲消爲渴者何也蓋水不濟火則火不歸原故有火游於肺而爲上消者」

「有火游於胃而爲中消者有火燄陰精而爲下消者是皆真陰不足水虧於下之消證也」

「又有陽不化氣則水精不佈水不得火則有降無昇所以入膀胱而飲一溲二以致泉源不滋」

「天壤枯涸者是皆真陽不足火虧於下之消證也」

「陰虚之消治宜壯水固有言之者矣」

「陽虚之消謂宜補火則人必不信」

「余因消證多虚難堪剝削若不求其斫喪之因而再伐生氣則消者癒消無從復矣 故再筆於此用以告夫明者」(表3)

表3 古医書に記載される病理

古医書	病因	部位	症状
『黄帝内経 素問』	美食過食で脾痺、内熱	脾	口内が甘い
『諸病源候論』	美食過食で脾痺、燥熱	脾、腎	口渴、口内が甘い、癰疽
『備急千金要方』	飲酒、長年の塩味、虚熱	三焦、五臓	多尿、大癰
『三因極一病証方論』	心火による精血の消耗、津液の枯渴	心、脾、腎	口渴、多尿、不眠、痩せ
『濟生方』	美食過食、丹石服用で腎水の枯れにて心火	腎、心	口渴、多尿、癰
『普濟方』	腎虚、美食、心火	心、脾、腎	口渴、尿少あるいは多尿
『丹溪心法附餘』	熱	肺	多飲、多食
『古今醫統大全』	心火の乘、肥満	肺、胃、腎	多飲、多尿、多食、小便淋
『證治準繩』	不適切な飲酒、精神の度を過ぎる、病による陰気の損失	腸、胃、腎	口渴、多飲、多食、多尿
『類経』	火の偏盛、上の神消と下の精消	心、肺、腸胃、脾、肝、腎	口渴、多食、消穀善飢、頻尿・便
『景岳全書譯注』	陰虚	肺、胃、腎	口渴、多飲、消穀善飢、痩せ、多尿、尿淋濁

また、これら古医書のうち7冊に病因が食事や飲酒によると記載されている。

『黄帝内経 素問』美食過食、『諸病源候論』美食過食、『備急千金要方』酒宴を続けること、『濟生方』節度のない飲酒、『普濟方』美食で肥る、『古今醫統大全』美食で肥る、『證治準繩』飲食物の不適當と述べられている。(表4)

表4 飲食飲酒が誘因と記載されている古医書

古医書	誘因
『黄帝内経 素問』	美食過食
『諸病源候論』	美食過食
『備急千金要方』	長期の飲酒 (酒宴)
『濟生方』	節度の無い飲食
『普濟方』	美食で肥る
『古今醫統大全』	美食で肥る
『證治準繩』	飲食物の不適當

そして、治療穴は中国古医書の代表的な2書『鍼灸資生経』、『鍼灸大成』を選び治療穴を抽出した。

『鍼灸資生経』は金代、1220年の王執中の著書で消渴第三巻に記載がある。

「商丘主煩中渴千 意舎主消渴身熱面自黄同朋」

「意舎關衝 然谷主消渴嗜飲」

「隱白主飲渴 勞宮主苦渴食不下」

「曲池寒熱渴」

「行間 太衝主乾善渴並干」

「意舎見 腹脹 中膺俞治腎虛消渴汗不出朋作汗出」

「兌端治小便黄舌乾消渴」

「然谷治舌縦煩滿消渴」

「水溝治消渴飲水無度朋 同」

『鍼灸大成』は明代、1601年楊繼洲の著書で消渴第二～八巻に記載がある。行間 湧泉。「主消渴之腎渴。」

「陰市 一名陰鼎 膝上三寸 伏兔下陷中 拜而取之 銅人針三分 禁灸」

「主腰脚如冷水 膝寒 痿痺不仁 不屈伸 卒寒疝 力痿少氣」

「小腹痛 脹滿 脚氣 脚以下 伏兔上寒 消渴」

「腎俞 十四椎下兩旁 相去脊各一寸五分 前與臍平 正坐取之」

「銅人針三分 留七呼 灸以年為壯 明堂灸三壯 素問刺中膺六日死 其動為噎」

「主虛勞羸瘦 耳聾腎虛水臟久冷 心腹填滿 脹急 兩脇滿引小腹急痛」

「脹熱 小便淋 目視 少氣溺血 小便濁 出精夢泄」

「腎中風 踞坐而腰痛 消渴」

「小腸俞 十八椎下兩旁。相去脊各一寸五分 伏而取之 銅人針三分 留六呼 灸三壯」

「主膀胱三焦津液少 大小腸寒熱 小便赤不利 淋瀝遺濁 小腹脹滿」

「泄利膿血 五色赤痢 下重腫痛 脚腫 五痔 頭痛 虛之 消渴」

「中膺俞 二十椎下兩旁 相去脊各一寸五分 俠脊伸起肉 伏而取之」

「銅人針三分 留十呼 灸三壯」

「明堂云腰痛俠脊裏痛 上下按之應者 從項至此穴痛 皆宜灸 主腎虛消渴」

「意舎 十一椎下兩旁 相去脊各三寸 正坐取之 銅人針五分 灸五十壯 至百壯」

「明堂灸五十壯 下經灸七壯 素註灸二壯 甲乙灸三壯 針五分」

「主腹滿虛脹 大便滑泄 小便赤黄 背痛 惡風寒 食飲不下 嘔吐消渴」

「然谷 一名龍淵 足内踝前起大骨下陷中 一云内踝前 在下一寸」

「別於足太陰之鄰 足少陰腎脉所溜為榮火 銅人灸三壯 針三分 留五呼」

「令人立饑欲食 刺足下布絡中脉血不出為腫」

「主咽内腫 不能内唾 時不能出唾 心恐懼如人將補」

「涎出喘呼少氣 足附腫不得履地 寒疝 小腹脹上脘胸脇」

「效唾血 喉痺 淋瀝白濁 痠不能久立 足一寒一熱 舌縦煩滿 消渴」

「陽池 一名別陽 手表腕上陷中 從指本節 直横下至腕中心」

「手少陽三焦脉過為原 三焦虛實皆之」

「素註鍼二分 留六呼 灸三壯 銅人禁灸」

「指微賦云 鍼透抵賦大陵穴 不可破皮 恐傷鍼縛曲 主消渴」

「行間 足大指縫間 動脈應手陷中 足厥陰肝脉所溜為榮火」

「肝實則瀉之 素註鍼三分 銅人灸三壯 鍼六分 留十呼」

「主嘔逆。洞泄。遺溺癱閉。消渴。」

「期門 直乳二肋端 不容旁一寸五分 又曰乳旁一寸半 直下又一寸半」

「肝之募 足厥陰太陰陰維之會 銅人針四分 灸五壯」

「主胸中煩熱 賁豚上下 目青而嘔 霍亂 泄利 腹堅硬」

「大喘不得安臥 脇下積氣 傷寒心切痛」

「喜嘔酸 食飲不下 食後吐水 胸脇痛支滿」

「男子婦人 血結胸滿 面赤火燥 口乾消渴」

「承漿 唇稜下陷中 開口取之 大腸脉胃脉督脉任脉之會」

「素註鍼二分 留五呼 灸三壯 銅人灸七壯 止七壯 過七七停四五日後 灸七七壯」

「明堂三分得氣即瀉 留三呼 徐徐引氣而出」

「日灸七壯 過七七停四五日後 灸七七壯」

「若一向不灸 恐足陽明脉斷 其病不癒 停息復灸 令血脉通宣 其病立癒」

「主偏風半身不遂 口眼喎斜 面腫 消渴」

「水溝 一名人中 鼻柱下溝中央。近鼻孔陷中。督脉手足陽明之會」

「素註針三分 留六呼 灸三壯 銅人針四分 留五呼 得氣即瀉」

「灸不及針 日灸三壯 明堂日灸三壯 至二百壯 下經灸五壯」

「主消渴飲水無度」

「兌端 唇上端 銅人針二分 灸三壯 主癩疾吐沫 小便黃舌乾 消渴」

「支正 主七情氣鬱 肘臂十指皆攣 及消渴」

「照海 主夜發室 大便閉 消渴」

「太谿 主消渴 房勞不心意婦人水蠱」

「海泉 一穴 在舌下中央脉上是穴 治消渴 用三稜針出血」

「消渴 水溝 承漿 金津 玉液 曲池 勞宮 太沖太衝 商丘 隱白」

「百日以上者 切本可灸」

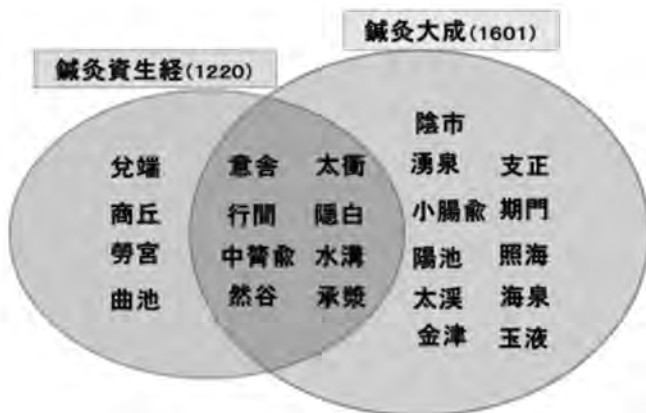
以上から『鍼灸資生経』と『鍼灸大成』の両方の医書に掲載されているのは「意舎」「太衝」「行間」「隱白」「中膺俞」「然谷」「水溝」「承漿」で、奇経を除くと「意舎」「太衝」「行間」「隱白」「中膺俞」「然谷」である。(図1)

【考察】

医書は、最も古いとされる『五十二病方』に消渴の記載はなかった。前漢初期に編まれたとされる『老官山漢墓』に消渴の文字が記載される。最も古く体系だった重要な医書として漢代に成立したとされる『黄帝内経』、隋代の代表的医書『諸病源候論』、唐代の代表的医書『備急千金要方』を使用し、唐代の代表的医書『外台秘要方』の消渴の病理、病因の記載は『諸病源候論』と同様であった。宋代の代表的医書『三因極一病証方論』と『鍼灸資生経』、金代の代表的医書『濟生方』、元代の『丹溪心法』を明代にまとめられた『丹溪心法附餘』、明代の『普濟方』、『古今醫統大全』、『鍼灸大成』、『證治準繩』、『類経』、『景岳全書譯注』が参照された。その他、消渴の方剤が多数記載されている古医書は別稿とした。

糖尿病は慢性の高血糖を主徴とし、エネルギー代謝、脂質代謝、蛋白代謝が複合的に障害される全身性代謝異常疾患である。典型的な糖尿病症状として、高血糖に伴う浸透圧利尿により口渴・多飲・多尿が生じるほか、尿糖によるエネルギー喪失や蛋白・脂質の異化亢進による体重減少がある。慢性の高血糖は細胞内への糖流入増加をもたらし、ポリオール経路¹⁾の過剰活性化などの細胞内代謝障害を惹起して最小血管の透過性亢進や閉塞、細胞外基質の増加を招き網膜症、腎症、神経障害の主たる要因となる。代謝障害を生じる経緯は多様であるが日本人の90%を占めるのは2型糖尿病で、主因はインスリン分泌障害とインスリン作用低下(抵抗性)の相加作用である。過栄養・肥満によってインスリン抵抗性が生じる機序は多様であり、内臓脂肪増加に伴う遊離脂肪酸の門脈内への過剰放出、肝の糖・脂質処理の障害、脂肪細胞のアディポネクチンやレプチンなどアディポサイトカインの分泌異常や、マクロファージなど炎症惹起細胞の浸潤に伴う慢性炎症¹⁸⁾、血管内皮のインスリン抵抗性による筋でのインスリン作用障害がある。2型糖尿病は遺伝要因が濃厚であり、欧米人やアジア民族の疾患感受性遺伝子の同定が報告されている。米国糖尿病予防プログラムの成績では、糖尿病の強力な遺伝子(TCF2多型)を有しても、生活習慣の適切な是正¹⁹⁾によって糖尿病リスクを半減しえた²⁰⁾。また環境ストレスによる発症要因として膵β細胞死²¹⁾も報告されている。近年、病原体由来ではない炎症として自然炎症についての報告²²⁻²⁵⁾があり、糖尿病をはじめ生活習慣病に深く関わっていることを示す文献がみられる。東洋医療における消渴は、古医書において、「心火」、「虚熱」、「燥熱」と、炎症を思わせる病因を指摘している。生体の恒常性

図1 『鍼灸資生経』と『鍼灸大成』の医書に掲載されている経穴



が崩れ、消渴という病態を現すのを陰陽論五行説を用いて示すと図のようになる。(図2) 消渴の鍼灸治療における重要穴の穴性²⁶⁾と病理²⁷⁾を、表に示す。(表5)

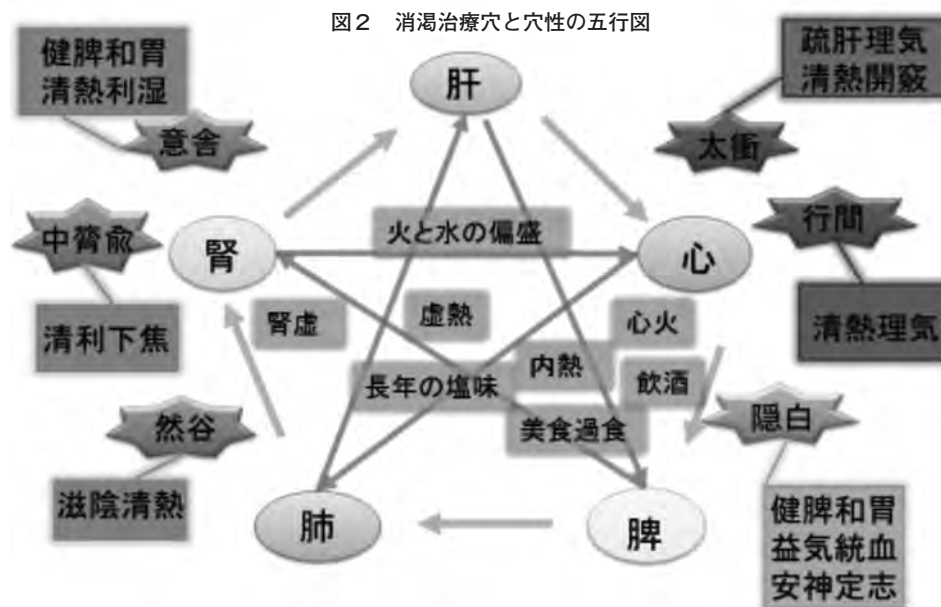


表5 消渴に有効とされる正経六経穴

経穴	経、要穴	穴性	病理
太衝	肝経 原穴 兪土穴	疏肝理氣 清熱開竅	肝気鬱滞 心火上炎
行间	肝経 榮火穴	清熱理氣	肝火上炎 痰火擾心
隱白	脾経 井木穴	健脾和胃 益氣統血 安神定志	肝陽上亢
然谷	腎経 榮火穴	滋陰清熱	陰虚発熱
意舍	膀胱経	健脾和胃 清熱利湿	脾胃不和 湿滯中焦
中膺俞	膀胱経	清利下焦	下焦湿熱 陰虚陽亢

穴性は、1934年羅兆瑠が初めて定義した。現在、腧穴の効能、薬能をモデルに表記することに論争があるが、消渴の病理を理解する上で有用と考え引用した²⁸⁾。

内因²⁸⁾として七情により気が滞る。気が鬱滞し火を形成する。これを病理現象として化火といい、実邪となって経絡に実反応をあらわし、実熱症状をあらわす。また、火は陰液を消耗し、陰液が消耗されると陽気を抑えることができず、虚熱となって陰虚症状があらわれる。不内外因²⁹⁾として暴飲暴食や油濃い物、甘い物の過食は脾の働きを阻害し気虚や湿邪という病理現象をあらわす。気の滞りによる熱や陰虚による熱、水穀の滞りによる痰濁による熱で各臓腑の陰陽バランスの失調をきたす。

病因の一つである心火は何らかの精神的なストレスによって起こるものや、過労や睡眠不足などにより発生し、腎の衰え³⁰⁾により心火を制御できず、心火が燃え、命門の火を上昇気流のように吸い上げ、ますます腎陰が減少してしまう病証となる。美食過食は陰液を滞ら

せ痰となり湿熱となる。湿熱は脾の運化と受納機能を低下させ、後天の精の供給源である脾からの滋養が減少し津液、血の生成に支障をきたす。酒は古医書に戒める記述が多く、「酷い熱をもっている」と記載され、現代も20の大規模なコホート研究のメタ解析によって多量の飲酒は糖尿病発症を促進する可能性があると報告されている³¹⁾。

消渴の治療穴「太衝」は肝気鬱滞、心火上炎の治療穴として鬱滞した肝気の流れを改善し心火の原因を取る清熱開竅の穴性を持っている。「行間」は肝気が火化した肝火上炎や痰と火が心神をかき乱した状態を治療する清熱理気の穴性をもっている。「隠白」は、脾経を補い臟腑関係の胃との健脾和胃をはかり、脾の作用である益氣統血を促し、母子関係である心と安神定志を保つことによって相克関係の肝の肝陽上亢を抑制すると考える。火を司る心と水を司る腎は健康時には心腎相交し、互いに生理平衡を保っている。心中の陽は腎陽を温養し、腎中の陰は心陰を滋養し、陰陽水火は動的平衡を保っている。それが、心火によって腎陰が虚損し、心腎不交し陰虚発熱する。「然谷」は、腎経の榮火穴で、熱を清し腎陰を滋養する滋陰清熱の穴性をもっている。「意舎」の意は脾に舎る思慮作用をあらわし、舎は脾気の出入りするところで、脾病を治す穴とされる。不摂生な食事やストレスによる脾胃の失調、甘い物、油ものの食べ過ぎにより脾の運化作用の失調で脾胃不和となり、湿熱が発生し湿滯中焦となる。「意舎」は健脾和胃、清熱利湿の穴性をもっている。「中膺兪」は、腎陰の虚損によって生じた下焦湿熱、陰虚陽亢を下焦である腎の湿熱を清する清利下焦の穴性をもっている。(表5) 消渴は「化火」し、陰液が虚損することによって発症している。それには気化の偏盛がまずあり、気化作用の大過であり亢盛である。気化偏盛は陽気に余剰があり相対的に亢盛になったものが「化火」である³²⁾。

陽気の転化作用が過剰になると、精血津液の気化過程を加速増強し、火は燃え盛る。同時に、陰分である精血津液を気化作用によって過度に消耗し、陽を抑制することができなくなり、気化作用はさらに亢盛する。はじめは暴飲暴食や精神的ストレスにより経脈の異常として実火実熱としてあらわれるが、気化の亢盛が長引き虚熱症状があらわれる。消渴は虚熱の前段階である実火実熱の病期までに各古医書の戒めである養生を行うことが第1次予防となると思われる。

【結論】

消渴の記載されていた『素問』は、主に陰陽説と五行説を基本理論とし、生理、病理、診断、治療、養生法を論じ、東洋医学の原典とされている。そして現代においても、中医学を学習するための必読書となっている。古医書からの研究は、最新のものに実践的臨床的価値を有する現代西洋医学との学術的な違いがあるが、生活習慣病である糖尿病も、古医書にある消渴も最も重要な治療は食事療法を代表とする生活習慣の変容である。鍼灸治療により陰陽五行のバランスを整えつつ、養生法を教育していくことが増え続ける糖尿病を減少させていけるものと考えられる。

- 1) 杉本恒明：糖尿病，内科学 第9版，1464-1488，朝倉書店，東京，2007.
- 2) 白川静：字通，177,795，平凡社，東京，1996.
- 3) 厚生労働省国民健康・栄養調査結果。
<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-10904750-Kenkoukyoku-Gantaisakukenkouzoushinka/0000032813.pdf>
- 4) 著者不詳：五十二病方，馬王堆漢墓帛書整理小組編，成立年不詳，全頁にわたって参照，文物出版，中国，1979.
- 5) 著者不詳：黄帝内経素問（上），成立年不詳，鍼灸医学典籍集成1，399，オリエント出版，大阪，1985.
- 6) 巢元方：諸病源候論，610年成立，東洋医学善本叢書6，43-44，東洋医学研究所，大阪，1981.
- 7) 孫思邈：備急千金要方 宋版（下），652年成立，東洋医学善本叢書11，55-56，オリエント出版，大阪，1989.
- 8) 王執中：鍼灸資生経，1220年成立，鍼灸医学典籍集成6,198，鍼灸医学典籍集成1，オリエント出版，大阪，1985.
- 9) 陳言：三因極一病証方論，1175年成立，北里研究所附属医学研究所，医史文献研究室編，136，エンタプライズ社，東京，1988.
- 10) 巖用和：濟生方，1253年成立，北里研究所附属医学研究所，医史文献研究室編，136，エンタプライズ社，東京，54-55，1988.
- 11) 朱肅：普濟方，1460成立，普濟方第四冊，2185-2190，人民衛生出版社，中国，1982.
- 12) 程充：丹溪心法附餘，1481成立，明隆慶六年山東布政使施篤臣刊本，1469-1473，新文豊出版公司，中国，1982.
- 13) 徐春甫：古今醫統大全，1565年成立，古今醫統大全（7）3519-3525，新文豊出版公司，中国，1978.
- 14) 楊繼洲：鍼灸大成，1601年成立，全頁にわたって参照，出版社と出版年は不詳.
- 15) 王肯堂：證治準繩，1602年成立，證治準繩（5），351，上海科学技術出版社，中国，1984.
- 16) 張景岳：類経，1624年成立，黄帝内経注解叢刊9，388-389，オリエント出版，大阪，1993.

- 17) 張景岳：景岳全書譯注, 1640年成立, 中医古籍名著編訳叢書, 721-725, 黒龍江人民出版社, 中国, 2008.
- 18) 谷口克, 宮坂昌之, 子安茂夫：炎症のメカニズム, 標準免疫学, 335-347, 医学書院, 東京, 2013.
- 19) 葛谷英嗣, 坂根直樹, 岡崎研太郎：わが国における2型糖尿病発症予防戦略, 糖尿病学の進歩 (第45集), 2011, 13-17, 診断と治療社, 東京, 2011.
- 20) 森保道：糖尿病の診断基準, 分類, 予防法, 内科113 (6), 1528-1530, 2014.
- 21) 石原寿光：糖尿病における β 細胞死, 実験医学28 (7), 198-205, 2010.
- 22) 栗原孝也：糖尿病性腎症における自然炎症の意義とその分子機序, 腎・高血圧の最新治療2 (3), 129-135, 2013.
- 23) 齋藤達哉, 審良静男：TLRおよびNLRを介した自然免疫応答, 実験医学, 32 (17), (増刊) 76-82, 2014.
- 24) 池田賢司, 小川佳宏：脂肪組織炎症とメタボリックシンドローム, 医学のあゆみ243 (1), 98-102, 2012.
- 25) 小川佳宏：メタボリックシンドロームと慢性炎症, 糖尿病学の進歩 (第44集), 2010, 120-124, 診断と治療社, 東京, 2010.
- 26) 東医針法研究会編：十四経穴性發揮, 東京, 全頁にわたって参照.
- 27) 王財源：わかりやすい臨床中医臟腑学, 第3版, 医歯薬出版, 東京, 2013, 全頁にわたって参照.
- 28) 井ノ上匠：第4回日本中医学会学術総会 シンポジウム⑤「穴性問題」シンポジスト, 発表原稿, 東京, 2014.9.
- 29) 高金亮, 劉桂平, 孟静岩：三因, 中医基本用語辞典, 237, 東洋学術出版, 千葉県, 2006.
- 30) 社団法人 東洋療法学校協会：東洋医学概論, 44-45, 80-82, 医道の日本社, 神奈川県, 2011.
- 31) Baliunas DO, Taylor BJ, Irving H et al: Alcohol as a risk factor for type 2 diabetes. Diabates Care, 32:2123-2131, 2009.
- 32) 宋鷺冰, 柴崎瑛子訳：中医病因病気学, 85, 人民衛生出版, 中国, 1987.

Report

Syokatsu on Old Medical Book

Yoshiko KUNIMATSU Shizuo TODA

Graduate School of Health Sciences, Graduate School of Kansai University of Health Sciences

Purpose : In recent years, diabetes mellitus (DM) is referred to as the modern disease, increasing population of DM is great to be caused living lifestyle. Syokatsu in old medical book be described reveal symptom of thirst, polydipsia, shineki (fluid humor) depleted, these symptom are similar to DM in the modern. That would be greatly helpful to acupuncture-moxibustion therapy for DM to extracted descriptions about syokatsu in old medical book.

Method : Koteidaikei, Shobyogenkoron, Bikyusenkenyoho, Saninkyokuitsubyosyohoron, Shinkyushiseikyo, Saiseiho, Huzaiho, Tankeishinpo huyo, Kokonitotaizen, Shinkyutaisei, Shochijyunki, Ruikei, Keigakuzensyoyakuchu were in referred.

Results : There were shown the old medical books in chronological order, we think that the most important books as described below.

1. Kouteidaikei kibyoronhen is described as “sweet taste in the oral cavity. This is referred to as hitan. It shows a state in which shineki stagnates spleen. This cause is gastronomy overeating, become fever overflow.”
2. Shobyogenkoron is described as “thirst and drink the water” , “carbuncles multiple” . This cause is same description in Koteidaikei.
3. Bikyusenkenyoho is described as “drinking” is major cause, precept living habit to prevent “drying of five viscera” . It necessity of precept is in order to prevent “big carbuncles.”
4. Saninkyokuitsubyosyohoron is described as “syokatsu is depleted seiketsu and depletion of shineki”
5. In Shinkyushiseikyo, the treatment acupuncture points of syokatsu are 12 points.
6. Saiseiho is described as “cause of syokatsu are all renal” and same commandments with Bikyusenkenyoho.
7. Huzaiho is described as “suffer from sansyo (three disappearance)” , same commandments with Bikyusenkinho and Saiseiho. These causes are xin huo (below the heart) .
8. Tankeishinpo huyo is described as “syokatsu divided into sansyo (three disappearance) , and it cause all heat.
9. Kokonitotaizen is described as “syokatsu is sansyo (triple energizers)” , same commandments with Bikyusenkinho, Saiseiho Huzaiho and Huzaiho. Cause of Shokatsu is multiply of shinka (heart fire) .
10. In Shinkyutaisei treatment acupuncture points of syokatsu are 19 points.
11. Shochijyunki is described as “the cause is food and drink. Alternatively excessive mental.” As the result, congestion of sounetsu (dryness-heat) according to loss of yin ki (yin qi) .
12. Ruikei is described that syokatsu divided into sansyo (three disappearance) . And dwell “yinyang of disappearance” , exhibit “it is questionable to be all hi-syo (fire pattern) .”
13. Keigakuzensyoyakuchu is in the same way as Ruikei that described that syokatsu divided into sansyo (three disappearance) . It emphasize “divided into kyojitsu (deficiency and excess) .”

Discussion : The symptom of syokatsu has thirst, polyuria, nephropathy, neuropathy, infection disease of skin soft tissue similar to DM. These symptom are described in each old medical books. The etiology of syokatsu to be kaka (transform into fire) , exhausted inbun (yin portion) because by becoming chronic ki (qi) , ketsu (blood) and shineki (fluid humor) of five viscera were stagnate. It has shown that the most significant for treatment of primary prevention, is the stage of jikkajitsunetsu (excess fire and excess heat) , previous step for yin xu (yin deficiency) .

Conclusion : These results demonstrated that the understanding of the most significant to be transfiguration of lifestyle at the acupuncture-moxibustion therapy by the consideration of syokatsu on old medical book.

Keyword : Shyokatsu, diabetes mellitus, old medical book